

---

# 恋愛の力タチ

莉雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛のカタチ

### 【Zコード】

Z9024C

### 【作者名】

莉雨

### 【あらすじ】

入内が決まった平安時代のお姫様と一従者の彼。婚約者のいる大  
企業のお嬢様とその執事の彼。それぞれがお互いのことを思いつつ  
も、身分違いのために自分の気持ちを伝えることの出来ない4人。  
彼らが選ぶそれぞれの、恋愛のカタチ。そしてその結末とは・・・。

## 01 ワタシと執事 -瑞穂Side-

幼い頃の私は、誰もが対等で、人は皆、平等だと思っていた。

だけどそれは真実ではなくて。

莫迦み<sup>ばか</sup>みたいに裕福で、くだらない事に拘る。

莫迦みたいな人達がいた。

そんな単純なことに気が付いたのは、幼馴染<sup>おさななじみ</sup>だった彼が、

私の執事になつた時。

気分は最悪だつた。

今私のにとって、身に付けている綺麗なドレスも、可愛い装飾品も、それを引き立てる物でしかない。

いつもは嬉しくなる窓の外で降っている雪も、今日は何とも思えなかつた。

雪・・・ああ、今日はホワイトクリスマスか。

なのに

「はあ・・・

気が付けば、自然と漏れてしまつた溜息。

これからのことと思うと唯々憂鬱で。

それと思い、本日一度目の溜息を吐こうとした時だった。

静かな部屋に、ドアをノックする音が響く。

慌てて背筋を伸ばす。

靖也<sup>せいや</sup>だ。

「お嬢様、支度は整いましたか？」

ドアの向こうから聞こえた声は、やっぱり予想した声と科白<sup>セリフ</sup>、そのままだった。

「うんー終わったよー」

明るくやさしく返事をすれば、彼は「失礼します」と言つて部屋に入つてくる。

「ねえ。このドレスどう? 素敵でしょ?」

そう言つてクルリと回り、無邪気そうに彼に見せると、優しく微笑んでくれた。

そんな彼の表情と言葉で、またも私の気分は沈んでいく。

「流石、美坂様がお選びになつたドレスです。瑞穂様によくお似合いでですよ」

「だよね! 雅紀様、センスいいもん」

私にピッタリ。そんな、心とは正反対の言葉が、気付けば口から零れ。

大嫌いな婚約者候補の名前を、笑顔で繰り返し言つ。

氣分、最悪。

「瑞穂様、そろそろお迎えの車がお見えになつているはずです。行きましょ!」

「うんー」

いつの間にか慣れてしまった様付きで呼ばれる名前。

まるで、私の名前が「瑞穂」から「瑞穂様」に変わったみたいで。最初は様を付けないでって言ってたけど、今ではもう呼んではもらえないんだと諦めた。

「今日は、正式に婚約が決定する大切な日ですよ。頑張つていらしてください」

「うん、勿論!<sup>モチロン</sup>頑張つて婚約決めてくるよ」

私が頑張らなくとも、もう既に、決まっちゃってるけどね。そういう決まりだから。

クリスマスに婚約して、正月に婚約発表して。

そして私の16歳の誕生日に式を挙げる。

全て決まったこと。

私は今、親の敷いたレールの上を順調に進行中なのだ。

最悪で、最悪だけど。

表面上は、あくまで嬉しそうにして。

また私は、自分の気持ちに嘘を塗り固める。

「では、行つてきます」

大好きな彼ではなく、大嫌いな彼とクリスマスを過ごしに。

「こつてらつしゃいませ

そう言つて、大好きな彼が車の扉を閉めた

私はまた、行き先を間違えた車で出発する

## 02 幼き日のボク等 - 良次Side -

「姫様。走り回ってはいけません。早くお戻り下さい  
良次もこっちにおいでよ！」

大内裏だいだいりを姫様が駆け回っていた。

初めてくる大内裏だいだいりの、姫様の屋敷とはまた違うその広さに、興奮しているのだろう。

姫様はいくら呼びかけても走るのを止めはしない。  
俺も姫様を追いかけ、走った。

辺りに他に人影は無く、此処にいるのは俺たち二人。姫様はあくまで楽しそうだったが、俺は必死だった。

忠邦ただくに 様に姫様のことを任せられたんだ。  
明子あきこ 姫に何か無い様に、しつかりしないと

つていうか、止まってくれ・・・！

情けないけど、もう、足が縛れそうで限界。

そんな俺の思いもよそに、姫様は止まってくれる様子も見せ無い。一体、その小さな体のどこにそんな体力があるんだ？

早く姫様を掴まえないと・・・。

そう思つて、以前来た時に覚えた此処の地理を考えると、ふと思い出せた。

あれ、確かにこの先は・・・

「姫様、危ない！其方そちらには池が・・・」

「え・・・？」

そう叫んだ刹那。

## バシャーン

鯉が飛び跳ねる。

池に思いっきり俺の体が浸かっていた。  
明子姫様は池の前で尻餅をつき、啞然としてこっちを見ている。  
実は、姫様が池に落ちそうになつた時に、俺は咄嗟に姫様の手を引いていたのだ。

で、それで明子様を無事助けられたら良かつたのだけど、代わりに勢いが付いて止まらなくなつた自分の体を、其処に落としてしまつていた。

服はビショビショ。

冬だからちょっと寒いな、なんて暢氣に思つたりしてみたり。  
乾いた笑いが出てくる。

はは・・・。  
俺、格好悪カッコ

けど、

「姫様、御怪我はありませんか?」

明子姫が無事で良かつた

「良次・・・えっと、どうしたら・・・」

明子姫はその一言に我を取り戻したのか、急にオロオロし始めた。

そんな様子が可愛くて、思わず笑ってしまう。

「取り合えず、池から出てもいいですか？」

池に落ちてびしょびしょの者が笑顔で、逆に落ちていない者が荒て  
顔。

傍から見たらきっと変な光景だつただろ。」

けど、そんな幼き頃が、幸せな日々だった

ねえ、姫様。

あの頃は誰、無邪氣で。それがどんなに幸せだったか。

知ったのは、其れを失くした後だつたけど。

## 03 執事のオレ - 靖也Side -

もうすぐ、新年が訪れようとしていた。

一般家庭の正月ならば、家族でのんびり過ごすはずなのかも知れないが、生憎、俺が仕えている主人は大企業の一人娘。

新年早々パーティーやら何やらで、とてもそんな正月を過ごせそうもない。

現に今、俺はパーティーの準備の真っ最中だった。

なのに・・・、作業がなかなかはかどらない。

疲れてる?

否、違う。

本当はその理由は分かっていたけども。

認めたくはなかった。

そう、そんなはず無い。

一度、休憩でもしよう。

そして、心を入れ替えてもう一度始めればいい。

そう思つて時計を見ると、新年まで丁度あと十秒。

心の中で、カウントダウンをスタートさせた。

1 0 • . . 9 • . . 8 • . . 7 • . . 6 • . . 5 • . . 4 • . . 3 •  
• 2 • . . 1

トントン

「明けましておめでとう。靖也」

年が明けると同時に開かれた扉に、見慣れた人影。驚いた。正直、驚いた。

まさか、新年早々、しかも、ほんとに年が変わつて一番に、まさか一番会いたい人に会えるなんて。

そんなこと、あるわけないと思っていたのに。

だからきっと、この時の俺の返事は、声が掠れていたと思つ。それくらい、気が動転していた。

「おめでとうございます、お嬢様」

「ごめん。明日のパーティーの準備中だつた？私、邪魔？」

「いえ、今休憩しようと思つていたところです。お嬢様もお茶、いかがですか？」

「うん、貰う」

瑞穂様に椅子を出し、俺は一人紅茶を淹れに向かう。一人になれてよかつた。そう思つた。まだ、気が動転したままだつたから。早く落ち着かせよう。この紅茶を飲んで。

俺はお嬢様の執事

それだけだ。

それさえ忘れなければ、きっと準備も終わるし、明日のパーティーもきりんとやれる。

「お待たせしました。お嬢様、どうぞ」

そう言ってカップを置けば、「ありがとうございます」と言つて瑞穂様はそれに手を伸ばす。

その手には、高級そうな婚約指輪が填められていた。

「こんな時間にどうかされましたか？」

「いくら年明けだからと言つて、今日はパーティーがあるのでから、早くお休みにならないといけませんよ」

「うん。でも、此處で過ごす最期の年明けだし…ちょっと起きとこうかなあつて」

もう直ぐ、瑞穂様はいなくなる。  
結婚して、この家を出て行く。

その場合、彼女の執事である俺はどうなるのだ？  
主人がいなくなってしまうのだからクビかな。  
そんなくだらない事を考えてみたりして。

現実逃避だ。

好きな人が他の人と結婚してしまうことからの。

「そうですね。今日は特別ですよ？」

あちらの家に行つたらこんな風に夜中に部屋から出歩くのはお止め下さいね

「もちろん。」

あつちではちゃんと大人しく、如月財閥のお嬢様やるから安心して！」

嗚呼。本当は今会えて嬉しいのに。  
出でくる言葉は執事としての小言ばかり。

嫌な奴だな、俺。

「お譲様なら、あちらの新しいメイドの方々とも直ぐ仲良くなられるでしょうし。

直ぐに美坂家の一員になれますね」

「だといいなあ。今度も、靖也みたいな人がいると良いんだけど」

心に無い科白<sup>セリフ</sup>ばかりだ。

本当は、あんなところになんて行つて欲しくない。

この前のクリスマスも、本当は送り出したくなかったのに。そして

今日のパーティーも。

婚約して、婚約発表して、結婚して。

本当は、全部壊してやりたい。何もかも。

俺は、お嬢様の執事

「あーあ。何か眠くなつてきちゃつた。部屋に戻るね

「お休みなさいませ。お嬢様」

「お休み。靖也」

まだ、忘れてはいけない。

でも、本当は誰よりも・・・

君を愛してゐる

絶対に貴女アナタに伝えはしない、俺の本心。

## 04 遠いワタシと彼 -明子Side-

世界が狭くなつた。

幼かつた頃は、自由に外を走り回り、自由な時間がまだ有つたはずなのに。

今は、何一つ残つて無い。

生活は唯、窮屈じゅうくだつた。

そしてそれは、私の入内じゅだいが決まってから、更に厳しくなる。

「姫様」

「どうしたの？」

私が直接会えるのは、仕えの女性だけ。

今日も、その彼女がやつてきた。

「良次様がお見えになりました」  
「わかつたわ、貴女は席を外して」

久しぶりの事だつた。

最近は、彼も滅多に訪ねて来てはくれない。

昔は二人でいつも一緒に遊んでいたのに。

今はもう、顔を合わせて話す事さえ叶わない。  
簾で遮られた先に、彼はいた。

「明子姫様。お久しぶりで御座います。この度は、姫様の御入内、

大変喜ばしく

「良次・・・」

「姫様?」

仕えの者達には皆席を外してもらつて今は一人だけ。  
そう思つと、ここから出て、直接良次を見たい衝動に駆られた。  
そんなこと、無理だけど。

「覚えてる？初めて大内裏に一緒に行った時の事」

「・・・・・　はい」

「あの時、良次は私を助けてびしょ濡れになつて」

「覚えてます。全部」

「あの頃が、一番楽しかった・・・」

自由で。貴方に触れることさえ簡単だったのに。。。

「今までありがとうございました。何度も、良次に助けられてきた」

「私も、姫様に仕えられて光栄でした」

姫だとか、従者だとか、そんなもの無くなればいいのに。

姫という鎖が私を縛つて。

「本当はね、良次のことが

」

嗚呼。

なんて莫迦なことを言おつとしているのだろう。

其の先の言葉は、声にならず消えた

本当はね、良次のことが

好きなの



## 05 ノクハク・瑞穂と靖也

純白のウエディングドレス。

それを着ているのは瑞穂だった。

結婚式当日のこと。

「よくお似合いですよ」

そう褒める靖也に、瑞穂は「ありがと」そう言って微笑む。華やかな結婚式前のワンシーン。

けど一人とも、内心は穏やかでない。

今日で、2人は別々の道を行くことになる。

それは、至極当たり前のことだけビ。

その現実が、唯辛い。

「では、美坂様をお呼びしてきます」

「待つて……！」

そう言って部屋を出た瑞穂の服の袖を、瑞穂は咄嗟に掴んでしまっていた。

一瞬、靖也は驚いたような表情になる。

「もう少し……一緒にいて」

その声は、彼女らしくなく、震え、掠れた声だった。

靖也は何も言わずに部屋に残った。

離れたくない。

これが、別れを惜しむ兄弟で、唯の兄妹愛だったらどんなによかったか。

そうしたら、こんなに苦しむ」とも無かつたのに。

沈黙が空間を支配する。

その沈黙を破つたのは瑞穂だった。

「 したくない」

「え？」

「結婚なんて したくない」

言ってからしまったと思ったが、もう止められなかつた。閉じ込めていた思いが溢れ出す。

「お嬢様、そういうことを無闇に言つてはいけませんよ」

「靖也はいいの！？私が結婚しても」

「美坂様は旦那様がお決めになつたお嬢様のお相手ですよ。お嬢様  
だつて 」

「私は嫌なの！あんな人、大嫌い！」

その言葉に靖也は目を見開いたが、一瞬のことでもぐにとの表情  
に戻つたので瑞穂はそれに気付かない。

「お嬢様、今になつて我慢を言わいでください」

言い聞かせるようにそう言った。

感情的になつてゐる瑞穂と違い、靖也はあくまで冷静だつた。まだ  
忘れてはいない。

自分が執事なのだといふことを。

「私は、靖也のことが大好きなのに！」

感情に任せて吐き出したその一言で、今まで保たれていたバランスが崩れ去った。

絶対、胸の奥で留めておこうと思っていたものが、ついに出てきてしまつた。

もう、戻れない。瑞穂は覚悟を決めた。

一方靖也は、いつもなら「冗談はやめてください」とでも言ひ、「瑞穂、支度は終わつたかい？」

コンコン

美坂だつた。

靖也の手を、瑞穂は無理やり引っ張つて窓から部屋を抜け出す。それきの一言で、靖也の中でも何かが崩れ去つていた。

「何を考えているんですか、貴女は！？」

もづ、部屋からだいぶ離れ、走るのを止めた時だつた。二人は、昔よく遊んでいた湖の側まで来ていた。いきなり靖也に怒鳴られ、瑞穂は声を失う。

今までずっと一緒にいたけど、靖也がこんな風に自分に言つてくれるのは初めてのことだった。

「折角俺が自分の気持ちを隠して、今までやつてきたつてこいつの...一貴女の考えなしの一言のせいです無しです」

「考えなしつて...!..」

「考えなしですよ。部屋を抜け出して。そうするつもりですか！？」

人の努力を無駄にして。つたぐ、どうしてくれるんだ。

自分の気持ち？

人の努力？

「・・・あれ？え・・・？」

瑞穂が違和感に気付く。

「待つて、もしかして靖也...」

「もしかしなくてもそりですよ。俺は、瑞穂が好きです」

「うそ...」

「こんな時に嘘ついてどうするんですか」

瑞穂がその場にへたり込む。

「何してるんですか

「だつて...・・・気が抜けて...・・・」

「しっかりして下さい。こんな状況にしたのは瑞穂なんだから  
「わ、わかってる」

「俺たちが両思いだったのは一先ずおいといで

「これからどうするかが問題ですね。

私は両思いだつたことのほうが問題だよ・・・。

瑞穂はまだ、気付いていない。

靖也の呼び方が、「瑞穂様」から「瑞穂」に変わったことに。

今までの行動がいきなり大胆すぎて

もう瑞穂の頭はついていけてなかつた。

## 06 トワの絆 - 明子・良次 -

明日がいよいよ入内の日。

今晚が明子が此処で過ごす最後の夜だった。

眠れない

もう、夜は深い。

早く寝ないととは思うのだが、明子はどうしても寝付けなかつた。  
明日からのことと思いつと憂鬱でたまらないのだ。

気晴らしに、少し月でも見よう。

そう思つて部屋から出た。

冬の夜の空氣は冷たく、透き通つていて。満月が綺麗に見えた。

「つきや・・・

どのくらい月を眺めていたのだろう。

気付けば月に見惚れていて、時間感覚がない。

突然、後ろから口を塞がれた。

誰？

そいつ言い掛けで思いとどまつた。

私、この人を知つてゐる。

明子は口を塞いでいる手を外し、名前を呼んでみる。

「良次・・・」

振り返つて見た顔は、やはり良次のものだった。

「明子姫様。御無礼をお許し下さい。

姫様が入内してお会いになれるくなる前に一度・・・」

明子は良次を咎める気など無かつた。

寧ろ、会えて嬉しいと思っていた。

「一度と叶わない」と思つたことが、今、叶つていいのだ。  
こんなに近くで会つのは、そして触れることが出来たのは、一体何時ぶりだらう。

お互に無言で、しばらく座つて円を眺めていた。

「明日、入内したらこんなことも一度とできないわね」  
「・・・・・」

「また、昔みたいに一人で遊びたい」  
「・・・・・」

「私、入内したくない」

「姫様・・・」

「良次、お願い。此処から連れ出して」  
「本気・・・ですか？」

前からずつと言いたかつたこと。

もづ、迷いはない。

明子が無言でうなづくと、良次は立ち上がり、明子に手を差し出した。

明子は其の手を取る。

二人で屋敷を抜け出した。

屋敷を出るのは何とかなった。

けど、明日には明子がいなくなつたのが見つかってしまうだらう。きつと明日には、明子を探しに追つ手が来てしまう。そうなれば、スグに見つかってしまい、明子は無理やり入内させられ、良次は殺されてしまう。

こうなつた以上、それは分かりきつたことだった。

一人は、昔よく遊んでいた湖のそばにいた。

「良次、こんなことに巻き込んでごめんなさい。

でも・・・私はずっと貴方のことが好きだった。今までも、勿論

今も」

「姫様・・・」

「ごめんなさい。こんな気持ち、貴方に言つつもりでは・・・」

「俺も」

「え?」

「俺も姫様のことが好きです」

そんな窮地に立つてゐるのに、一人の心は穏やかだった。

二人とも、「好き」。唯その一言でよかつた。

一人で寒さを紛らすように、お互ひ引っ付いて其処に座り、夜が明

けるのを待つ。

昔の思い出話を沢山した。  
直接会えなかつた年数を埋めるかのよつて。  
沢山のこと話をした。

「こんなに喋つたのは久しぶり」

そう言って、また笑つた。

吐いた息は真っ白だが、そんなのはまったく気にならない。  
幸せな時間だつた。

もつ直ぐ、日が開ける。此れからどうするか。

もう、一人の気持ちは決まつていた。

「行こうか」

どちらとも無くそう言つた。

良次が先に立ち上がり、明子に手を差し出す。差し出した手を取つて、明子も立ち上がつた。

二人とも、無言だつた。

唯、お互いの手を堅く繋いで

湖に向かつて歩き出した

これからは、ずっと一緒にいられる。

貴方と、  
永久に・・・・・

空から静かに雪が舞い落ちた

## 07 カレの本性 -瑞穂・靖也-（前書き）

いよいよこの話もあと少し。  
ですが、ここから靖也のキャラが壊れてきます。  
壊れた執事さんを見たくない方はご注意を。

## 07 カレの本性 - 瑞穂・靖也 -

「し、心中…？」

「丁度そこに湖もあることですし、一人で入りますか？」  
「つちよ、ちよつと待つて、靖也。心中つてのはちよつと……」

瑞穂が慌てたように返事をする。

靖也は至つて冷静そうで、真顔だつた。

「冗談ですよ。ようは、その程度の覚悟があるかつて事です」

第一、折角両思いだと言つのに死んだら意味無いですし。  
そう言う靖也に、瑞穂はあんな顔でそんなこと言われたら[冗談に聞  
こえないって。

心の中で突つ込んでいた。

「つていうか、靖也つてこんなキャラだっけ……？」

もつと真面目で誠実つて感じだつた氣がするのに。今ではまるで…

黒い？

と言つかるで、王子様的性格のような。  
今までと正反対の性格に見えるんだけど……。

一人心の中では思案していると瑞穂の思いもよらぬ所から返事が返つ  
てきた。

「そんなことあつませんよ

勿論驚いたのは瑞穂である。

「えー？ もしかして靖也って心の声が聞こえたり・・・」

「心の声？思いつきり声に出てましたが」

「ええ！？」

一步、靖也が近づいてくる。思わず、瑞穂は一步後ずさつた。  
が、後ろは木。

下がれない。ヤバイと思ったが、時既に遅し。

靖也の両手に阻まれ、横に逃げることも叶わなかつた。

靖也の手が伸びてきて、頬に触れる。

そして、彼の顔も近づいた。お互いの吐息が感じられる距離。

「俺は、元がこの性格なんです。

確かに今まで瑞穂の執事だったから性格キャラ作つてましたけど？」

「・・・」

ななな・・・顔が近い！

間近で見る靖也の顔は端整で。

真直ぐと見つめてくるその瞳は鋭く、瑞穂を縛り付けて逸らすこと  
もできない。

瑞穂の顔は見る見る赤くなり。

完全に、靖也が主導権を握っていた。

「ひつなつた以上、もう瑞穂とは主従関係でなくなつた訳ですし。  
その必要もあつませんからね

そういうつて靖也が微笑む。

その表情は、執事だったときのそれとはまた違っていた。  
顔の温度が更に上昇していくのを感じる。

もひつ、瑞穂は何も言い返すことが出来ない。

ついには靖也の顔も見ていられなくなつて、俯いた。

靖也はそんな瑞穂の変化を分かつてか分からずか（否、絶対分かつてだけ）、更に言葉を続ける。

「さて、結婚式当日にひつやつて美しい花嫁を奪還できたのは良いですが、どうやって瑞穂の御父様（社長）に認めてもらいましょうか。

既成事実でも作つとりますか？」

「き・・・既成事実つて・・・？」

「瑞穂の想像通りだと思つけど？」

靖也は瑞穂の反応を見て楽しんでいた。

それはもひつ。こんな嬉しそうな靖也を見たのは久しぶり、つて程に。それとは反対に、瑞穂の心臓は緊張で破裂しそうな気分だった。

悪魔だ。

生まれてから今までずっと一緒にいた筈なのに。  
なんでそのことに気が付かなかつたんだろう。

「私、人選間違えた？」

「後悔しても遅いよ。瑞穂が俺を誘惑したんだから」

こんな靖也とだと、心臓が幾つあつても足りない。  
これからどうしよう、と思いつつも、どうやって両親を説得するか

悩んでいた。

やつぱり、大好きなのだ。

世界で一番、靖也のことが。

そしてまた、靖也も

・・・

近づいてくる唇に、瑞穂はゆっくりと瞳を閉じた

「おかあさま、おとうさまがかえってきたよー。」

まだ一歳、三歳の可愛い男の子が嬉しそうに玄関へ向かつ。その姿は、幼い頃の靖也そっくりだった。

「おとうさま、おかえりなさいー。」

「ただいま、拓真」

そう言って頭を撫でられた拓真は、嬉しそうに目を細める。そして、彼は後から急いでやってきた女性に目を向けた。

「ただいま、瑞穂」

「お帰りなさい、靖也」

靖也と瑞穂がお互いの気持ちを告げてから、八年の年月が経つていた。

今、暖かな家庭がここにある。

あの後式場に戻ると、瑞樹がいなくなつたと式場は大騒ぎになつて、勿論、二人はこつてりと叱られた。

が、結婚のことに関しては、瑞穂がしたくないならそれでいいと言われたのだ。

元々、両親は一人娘の瑞穂には甘かつたし、如月家と三坂家の繫がりも、

あつちが執着していただけで、世界の如月財閥としては美坂グループとの繫がりはどうちでもよかつたらしい。

唯、次期社長である雅紀の年齢や容貌で瑞穂の相手に相応しいだろ

うと言つことで決めたとか。

だから、そこまでして本当に好きな人がいいならそれでいいと。  
寧ろ、靖也の方が昔から知つてゐるから安心だ、とまで言われた。

正直、二人は心中・・・とまでいかないが、勘当は覚悟していたので、拍子抜けだつたけど。

しかし、そんな寛大な両親のおかげで一人は付き合つこととなり（実は、瑞穂の両親より靖也の両親のほうが大変で。仕えているはずの主人に手を出すとは何事だ、と怒鳴られ散々だったのはまた別の話）、

三年前、ついに結婚した。

今は長男の拓真も生まれ、家族円満。

それに会社のほうも順調で、財閥は靖也が継ぐことに決まつていた。

そのため、少し忙しいけど、それは仕方ない。

今、幸せ真っ盛りだつた。

ねえ、知つてた？

私たちがあの日逃げて行つたあの湖。

昔、私たちみたいに身分違いの恋をした人があそこで心中したんだつて。

私たちも、御父様達が許してくれなかつたらそうなつてたのかな。

それもきっと一つの愛の形だけど。

私は御父様たちが許してくれたことに感謝してゐるの。

だつて、

今此處に靖也がいて、私がいて。

そして、拓真がいる。

それがとても幸せだから。

私はあの日のことを後悔してない。

靖也は 今幸せ？

それは、あまりにも当たり前すぎる問いかけで。  
靖也は答える代わりに、瑞穂の肩を抱き寄せると、そつと唇を合わせた。

「今度、あの湖に拓真を連れて行ってみようよ」  
「そうだね、拓真に教えてあげないと」  
「なんて？」  
「それはもちろん、

「」でもお父さんとお母さんは初めてキスしたんだよ

つて

「そ、そんなこと拓真に言わなくていい！  
・・・でも、教えてあげなくちゃね」

一人にとつて大切な場所なんだよって

二人は膝の上で健やかに眠っている拓真を見て、微笑んだ。

これからも、ずっとずっと愛してる

窓の外では月明かりの元、静かに雪が舞っていた

これが私達の、恋愛の力タチ

## 08 恋愛のカタチ（後書き）

これでこの作品は完結です。

ここまでおつきあい有難う御座いました。

感想などがあれば是非お聞かせ下さい。

- 莉雨 -

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9024c/>

---

恋愛のカタチ

2010年12月3日14時25分発行